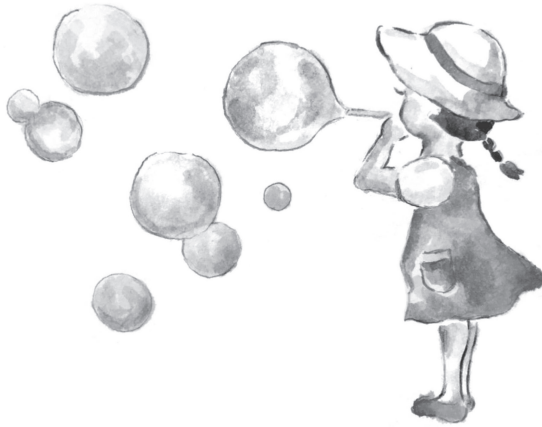


シャボン玉 野口雨情作詞

しゃぼん玉、とんだ  
屋根までとんだ  
屋根までとんで  
こわれて消えた

しゃぼん玉、消えた  
とばずに消えた  
生まれてすぐに  
こわれて消えた  
風、風、吹くな  
しゃぼん玉、とばそ



大学の解剖実習室かいぼうに初めて足を踏み入れたときのことです。

医大生が初めて解剖実習に出席すると、たいてい何人か気分が悪くなつて途中で部屋を出ると聞いていた私は、果たして自分はどうかだろうか、大丈夫だろうか、そんな不安を抱えながらも、ともかく実習室に入りました。そして私は、自分の心の動きがどうかを注意深く観察するように努めました。部屋の中には多くの解剖台が置かれ、学生たちがそれぞれの台を取り囲んでいました。台上に横たわる献体は、すでに解剖作業が進んでいて、初めて目の当たりにするその異様な光景に私は圧倒されました。

これはあとになって気がついたことですが、私は、そのとき心の中で、「ああ、そうか」とうなずいていました。野口雨情のあの「しゃぼん玉」の歌を思い出していたのです。

せっけん水をストローの先につけて吹くと、しゃぼん玉ができます。しゃぼん玉の「誕生」の瞬間です。こわれないように注意深く息を吹き込み、適当な

大きさになったらストローの先から切り放すと、シャボン玉は宙に浮きます。

子どもたちは、自分のしゃぼん玉を遠くまで飛ばそうと腕を競い合います。しゃぼん玉にとつての晴れ舞台といえは、風に乗ってふわりふわりと飛んでゆくとときでしょう。どこまで飛んでゆくだろうか、とみんなが見守ります。自分の飛ばしたしゃぼん玉が屋根の上まで飛んでいったら、「あれ、ぼくのだ」と得意になります。

しかしながら、このしゃぼん玉も、時間がたつと次第に割れやすくなる。しゃぼん玉もまた「老」<sup>おい</sup>のときを迎えるのです。強い風に吹き飛ばされて、なにかにぶつかって傷つけば、それは「病」<sup>やまい</sup>です。次の瞬間、割れて「消え」る、それが「死」です。しゃぼん玉もまた、誕生から、古い、病み、そして死を迎えて、一生を終えるわけです。この世に生を受けたものは、みな成長して花開き、いずれ老いて、病に倒れ、そして死んでゆきます。いわゆる「生老病死」<sup>しょうろうびやうし</sup>です。これは、生命がもつ宿命であり、誰も逃れられません。生まれる、老いる、病に倒れる、そして死を迎える、どれも思いどおりにはならない。ここに、生を

受けたものの悲しみ、苦しみがあります。

ブツダ（お釈迦さま）は、この四つの苦しみを「四苦」と表現しました。

これは、生命をもたない無生物にも当てはまる現象で、地球や宇宙でさえ寿命があり、いずれ必ず消滅するのだそうです。もちろんしゃぼん玉も同じで、誕生し、「屋根までとんで」、「こわれて」そして「消え」る、という「生老病死」をへて消えてゆくわけです。

こうしてみると、しゃぼん玉の歌は、単にその動きを淡々と描写しているだけではなく、なにか大きな世界が暗示されているように思えます。つまり、なんの変哲もないしゃぼん玉を描きながら、じつは人間の「生老病死」の姿を示唆している。しゃぼん玉はまさに人生の象徴だ——そんなふう感じとれます。

歌詞の一番が、しゃぼん玉の動きによって「生老病死」の流れを示唆し、写実的に描いているのに対し、続く二番はこうです。

しゃぼん玉、消えた

とばずに消えた

生まれてすぐに

こわれて消えた

風、風、吹くな

しゃぼん玉、とばそ

一番の「こわれて消えた」の余韻を引き継いで、「しゃぼん玉、消えた」と繰り返します。しかし、同じ「消えた」でも、今度は、しゃぼん玉が「とばずに消えた」のです。

これはショッキングです。「屋根までとんで／こわれ」というのは、ごく自然の流れで、しゃぼん玉がその生命いのちを全うまっとうした形です。しかし今度は違います。風に舞う晴れの姿を見てもらうこともなく、「生まれてすぐに／こわれて消えた」のです。これはなんとも悲しくせつない話です。

この「しゃぼん玉」の作詞者は野口雨情ですが、作品の背景についていくつか説があるようです。最大の手がかりは、この歌を作る十数年前に誕生直後の長女を失った、という事実です。その体験が反映されているという見方と、十数年もたつてから長女の死を取り上げるのは不自然だという異論もあるようです。それについては深入りを避けます。

それよりも私は、この「しゃぼん玉」の歌にある、「愛別離苦」という人間の苦の問題に焦点を当てたいのです。「愛する人と別れる悲しみ、苦しみ」という普遍的な、誰にも逃れえない人生の冷酷な試練について考えたいのです。

私たちがよくつかう「四苦八苦」という言葉の「八苦」は、「生」、「老」、「病」、「死」の「四苦」に、さらに四つ、「怨憎会苦」、「愛別離苦」、「求不得苦」、「五陰盛苦」を加えたものです。

憎き相手に会う苦しみ、いとおいしいものとの別れ、求めても得られないつらさ、心や身体が作り出す苦悩。どの苦も仏教の根底をなす人間洞察から説かれたもので、私たちの人生を大きく左右する苦しみです。

なかでも「愛別離苦」は、じつに厳しくつらい体験です。ことにわが子に先立たれる悲しみは、生涯、心の奥底に重石おもしとなつて残るはずです。わずか七日でこの世を去つたわが子への思いが、感受性豊かな詩人の心からすつかり消え去るものかどうか。たぶん雨情は、「生まれてすぐに」「こわれて消えた」わが子のことを、終生、忘れなかつたに違いないと私は思います。ああしてやれば、こうしてやれば、なんとか命を助けてやれたかもしれない。そんな後悔の念をもつのが親心だと思ふからです。

ですが、仏教でいえば「生者必滅しょうじやひつめつ、会者定離えしやじょうり」です。「生者必滅」、つまり生きとし生けるものは、生まれ落ち、生命の営みを終え、死んでこの世を去つてゆく。「会者定離」、その人生で出会つたものには必ず別れのときが訪れます。この厳然たる事実を凝視する無常観は、仏教文化の根底を流れてきた基本的な感受性です。「諸行無常しよぎやうむじやう」といわれる諸相の自覚が仏教徒の出発点です。どんな善人でも、どんな悪人でも例外なく平等に死を迎え、この世から消えてゆきます。

「愛別離苦」には、生き別れと死に別れの二つの場合が考えられます。さらに、愛する人の死に自分が直面する場合と、愛する人を残して自分が世を去る場合とがあります。別離のつらさは同じでも、置かれた立場は大きく違います。お棺に横たわるのが、愛する人なのか自分自身なのかでは、やはり大きな違いがあります。

あるとき、結婚したばかりの若夫婦の夫が亡くなりました。お葬式の日、出棺のお経が終わって、お棺の蓋をかぶせようとしたときです。半狂乱になった若い妻は、立ちほだかつて蓋を閉めさせず、みんなの制止を振りきって、自分もお棺の中へ入ろうとします。誰もがその気持ちに痛いほどわかるだけに、ただもらい泣きをするほかはありませんでした。

あたりまえです。「愛別離」という最大の悲しみに半狂乱となるのが当然です。愛する人が、死を境に自分から遠く遠く離れていってしまうのです。

小林一茶もつらい体験をしました。五十六歳の一茶がさずかった長女と



は、文字どおり目に入れても痛くない愛児で、代表作の『おらが春』には、そのかわいがりようが描かれています。

這へ笑へ 二つになるぞ 今朝からは

この句は、初めての新年を迎えたときの作品で、一茶の溺愛できあいぶりが目に見えるようです。しかしながら、そのあどけないさとも、一歳を過ぎたばかりでの世から姿を消してしまいました。

露つゆの世は 露の世ながら さりながら

この「さりながら」に、一茶の万感の思いが込められています。この世が露のようにほかないことは百も承知だけれど、だけれど、だけれど……。わが子に對する、これ以上ない深い悲しみです。私たちは伝統的に、この「露の世」へ

の感受性を深めてきました。

金剛般若経こんごうはんんにゃきょうに、一切の存在は、

如夢幻泡影によむげんほうよう

夢、幻、泡、影のごとしまぼろしあわかげ

とあります。夢、幻、泡、影のどれもみな、はかないものの代名詞です。そして、しゃぼん玉はまさに「泡」そのものですから、「しゃぼん玉」の歌は、「露の世」という仏教的感受性の伝統を受け継いだものと言えます。

私は僧侶として、「四十九日しじゅうくにち」の法事（法要）のお勤めをします。若き日には抵抗感のあつた法事ですが、年齢とともに見方が変わりました。

喪もに服する「四十九日」の期間は、「中陰ちゅういん」と呼ばれます。説話では、死者の霊（魂、靈魂）が落ち着く場所を求めて宙をさまよう期間です。残された者は、

霊がしかるべき居場所を見つけるのを願って法要を営みます。七日ごとに墓参りを繰り返し、七回目にあたる四十九日（七七忌しちしち忌）には、この中陰期間が終了（満中陰まんちゆういん）し、「満中陰忌（七七忌）」と呼ばれる法要を営むわけです。

若かった私には、こんな非科学的な話はなじみませんでした。死者の霊が四十九日間、宙をさまよっている、などという話は、現代人には向かないと感じてきました。そして長く放置してきた懸案に、やっと気がついたのです。

満中陰忌の法要は、亡くなった方への追悼ついでうの行事であると同時に、現に生きて悲しみのどん底にある人のためのものだ、と。現代人にとって、「四十九日」の法要の意味は、たぶんここにあるのでしよう。

つまり中陰とは、残された者が悲しみの底から、ふだんの自分に戻ってゆく期間と言えます。宙をさまよい、心ここにあらずの日々から、いくぶんでも地に足がつき、自分自身が日常生活に戻るのには、この四十九日という時間が大

きな意味をもちます。ですから私は、どん底の悲しみを克服するためのこうした智慧に、深い人間洞察の眼を感じるのです。中陰の説話は、人生という一つの物語を、さらに豊かなものにするのに必要な、もう一つの物語なのだと思います。

これまで棺に横たわるご遺体を前にするたびに私の脳裡を横切る言葉がありました。それは曹洞宗の宗意を説く『修証義』にある「生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり」という言葉です。私は、この生死の大問題に対して仏教徒である自分の未熟さを、つねづね恥ずかしく思ってきました。「生命」は、「身体」と「心」が一体となって成り立っています。その生命がなんでいるかを知るには、やはり身体と心の両面から見る必要があります。仏教ではそのことを「身心一如」といいます。

生（誕生）から死までのあいだが私たちの人生です。ですから「生死」は人

生と同意語ですが、かつて道友ゲーリー・スナイダー（アメリカの詩人、第七章参照）が私に、「生死より、生愛死」のほうがわかりやすい」と言ったことを思い出します。生まれて、なにかを愛して、そして死んでゆくのが人生なら、生と死のあいだに愛を加えて、「生愛死」と表現したほうが確かに明確です。

生きることは愛すること。この世に生まれ落ちた私たちは、それぞれ、世界にたった一つの自分だけの「物語」を創造し、それを残して去ってゆく。人生を一つの物語と考えれば、「中陰」の説話には、人生という物語を創造するうえで、味わい深いヒントがあります。

冒頭の解剖実習の話に戻ります。

実習前は自分の心がどんな影響を受けるか、いささか不安でしたが、実際にはなぜか不思議なほど冷静でした。まったく非日常の異様な光景の中で、私は目の前の献体を直視できたのです。それまでの不安感はすっかり消え去り、気持ちを実習に集中できたのは、われながら意外でした。

私は、自らを献体として提供なさった人々の、その尊い志に思いをはせました。自分だったら献体するだろうか、と自問自答しました。そして、心の奥底でつぶやく自分の声を聴きました。「そう、空だ。空なんだ」。

一休いっきゅう禪師（二休そしゅう宗純、一三九四〜一四八一）はこう言います。

骸骨がいこつに 着物をきせて 連れて来て

女房にようぼうなんどと 云うぞおかしき

（『ぜんりんせ禪林世語集』）

もともと「空」の身体に、きれいな着物をまとい、気取って歩いて見せたところしょうしせんばんで笑止千万、と言うわけです。般若心経の「色しき即是空こくう」のとおり、目に見える現象の「色」はそのまま「空」だ、その「空」を見てとれ、と言うメッセージです。私が解剖実習の献体に見たのは、すでに「空」の姿だったのです。

「空」という文字は、ノミで開けた「穴」からできたようです。穴が無限大

に広がってゆけば、「空・大空」となるし、中になにもなければ「空」と読まれ、空っぽだから空しいという感覚が生まれます。こうしたところから、すべてこの世のものは、因縁によって生じたにすぎず、実体をもたない仮の姿であるという、仏教の「空」につながるのでしょうか。

しゃぼん玉の薄い膜が破れ、「こわれて消えた」あとには、ただ、澄みきつた青空が無限に広がるばかりです。しゃぼん玉はもはや跡形もありません。しゃぼん玉はまさに仮の姿で、現象であり、その薄い膜が破れると、残るのは無限の青空です。「空」の世界です。

およそ運命は不平等です。「屋根までとんで／こわれて消えた」のは、いわば志をはたして迎える死です。ところが、「生まれてすぐに／こわれて消えた」という悲しい死もあって、どうにも運命はままなりません。

しかし死は平等です。誰にも平等に死はやってきます。それがいつかという

運命の点では不平等ですが、必ずみな死を迎え、「こわれて消え」てしまう点では平等です。それなのに日頃の私たちは、いつか自分も必ず死ぬという現実を忘れがちです。自分の生命いのちが「しゃぼん玉」と同じだという事実をつい忘れていきます。

次は江戸時代の狂歌師、太田南畝おおたなんぼ（蜀山人しよくざんじん）の狂歌です。

今までは 人のことだと 思うたに

おれが死ぬとは こいつはたまらん

（同前）

お葬式はいつも他人ひとごと事です。死ぬのはいつも他人です。しかし、自分の生命がいつ、どこで、しゃぼん玉のように消え去るのか、それは誰にもわかりません。しかしまちがいに、自分にも死ぬという大切な仕事が行っていることは確かです。

愛する人を見送る側か、見送られる側か、どちらにしても私たちがよく生き



ようとするかぎり、「愛別離苦」を乗り越える覚悟と努力とが必要です。そして、その努力をする人には、きつとどこからか「風」が吹いてくるはずです。それまでのあいだ、私たちにできることは、目の前の現実にひたすら誠実に立ち向かってゆくことだけなのでしょう。

一九八五年、私が禅語収集のためアメリカにいたとき見つけた「私のお墓の前に立って泣かないで」という詩があります。これはのちに日本でも、「千の風になって」という歌でよく知られています。ただ、この原詩の心境に至るには順序として、本章で取り上げた、深い悲しみに涙する体験をしつかり踏まえする必要があります。そこで私の作ったのが次の詩です。

千の風になる前に

私のお墓の前で泣いてください

声を上げて泣いてください

だって、もはやあなたには

私の姿は見えない

私の声も聞こえない

手を伸ばしたって私まで届かない

遠い世界へ私は来てしまいました

どんなに会いたくても

二度と会えない離れ離れの二人

だから、私を想って

どうか思いつきり

---

私のお墓の前で泣いてください  
深い悲しみに涙するのは人情の証あかし  
愛別離の涙は愛する心の贈りもの

でも、涙でいっぱい目のには  
果てしなく広がる青空は見えません  
泣いて、泣いて涙が枯れはるとき  
そのときはもう

私のお墓の前で泣かないでください

---